

大学生の高等学校における家庭科住居領域の学びの現状

小林 文香*

(2016年11月24日 受理)

University Students' Experience about the Housing Field of Home Economics Education in Senior High School

Fumika KOBAYASHI*

1. はじめに

少子高齢化、家族形態やライフスタイルの多様化、雇用の多様化・不安定化が進行している現在、多様なニーズを持つ人々が多様な生活を営み、共生する社会の実現が求められている。そして、若者には、このような社会を担っていくために、学力だけでなく、「生きる力」としての意思決定能力、問題解決能力、生活の場での技能・技術および実践力が必要となる。

2009年（平成21年）3月に改訂された高等学校学習指導要領では、「確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する『生きる力』をはぐくむ」ことが重視され、家庭科教育においては「自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、生涯の見通しをもってよりよい生活を送るための能力と実践的な態度を育成するために、目標を『人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ、家族・家庭の意義、家族・と社会とのかかわりについて理解させるとともに、生活に必要な知識と技術を習得させ、男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる』¹⁾」としている¹⁾。

しかし、高等学校における家庭科教育で扱う内容は、家族・家庭生活、保育、福祉、衣生活、食生活、住生活、消費生活、生活設計など広範囲にわたり、かつ各領域で専門性が深化している。そのため、教育現場では、教員の専門性が授業計画に現れやすく、自身の専門外の領域の授業に対しては不安を感じている現状がある²⁾。また、第22期日本学会議会員および連携会員で構成された健康・生活科学委員会家政学分科会は、大学生に対し、人と暮らしに関する総合的な教育が必要であると、³⁾「生活する力を育てること」を目的とした教養科目開

設を提案し、テキストを編纂している。その中で、家庭科教育の意義を説きつつ、高等学校までの家庭科の授業時間数が少なく、十分な効果を挙げていないことを指摘している³⁾。

このような中、大学生たちが高等学校卒業時まで「生活に必要な知識と技術」、「主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度」を十分に習得しているとは考えにくい。これは、将来家庭科教員となる家庭科教職課程の学生たちにも言えることである。家庭科教職課程の学生たちは、大学時代においても継続的に「生活に必要な知識と技術」、「主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度」を学び、養う必要があり、教職に就いた際はそれらを次世代に教えていかなければならない。よって、家庭科教職課程をもつ学部・学科では、大学生の高等学校までの学びの現状をふまえたカリキュラムおよび学習支援を実施する必要がある。特に、家庭科住居領域においては、大学時代に住居領域を専攻した教員が少ないこと、教員が住居領域に対し苦手意識を抱えていること、住居領域の教材が不足していることが指摘^{4,5)}されており、住居領域のカリキュラムの充実、家庭科教職課程学生への学習支援が必要と考える。

そこで本研究は、家政系学部の学生を対象に高等学校での家庭科住居領域の学びの現状を明らかにし、家政系学部における家庭科教職課程カリキュラムを検討するための基礎的資料を得ることを目的とする。

2. 調査概要

2012年度、2014年度に広島女学院大学人間生活学部で開講している「住生活論（含住居学概論）」履修学生を対象に、高等学校における家庭科履修状況についてアンケート調査を行った。「住生活論（含住居学概論）」は広島女学院大学の家庭科教職課程カリキュラムにおいて住

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン・建築学科准教授

居領域の1年次必修科目として位置づけている。履修者には教職課程学生のほか、被服・ファッションデザイン、住居・建築デザイン、食物分野を志向する学生がいる。調査概要を表1に示す。

表1 調査概要

調査日	2012年9月24日 2014年9月22日
調査対象	広島女学院大学人間生活学部 「住生活論(含住居学概論)」履修者
調査方法	無記名式アンケート調査
配付数	2012年：114配付，2014年：45配付
有効回答数	2012年：94回答，2014年：36回答

3. 調査結果および考察

(1) 高等学校家庭科の履修状況

1) 履修科目および学年

高等学校で家庭科を学んだ経験を聞いたところ、回答者全員が「学んだ」と回答した。高等学校で履修した家庭科の科目を図1に示す。履修科目は、「家庭基礎」が2012年調査では41.5%，2014年調査では33.3%だった。また、「家庭総合」は2012年調査は28.7%，2014年調査は19.4%だった。なお、科目名を覚えていない学生が2012年調査では25.5%，2014年調査は47.2%であった。

次に家庭科を履修した学年を図2に示す。1年生のときに家庭科を履修した学生が最も多く、2012年調査では48.9%，2014年調査では58.3%であった。次いで、1年生および2年生の時の履修が多く、2012年調査では22.3%，2014年調査では16.7%であった。

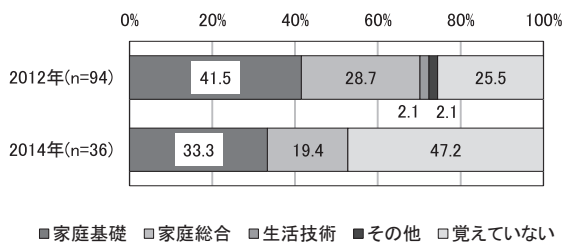


図1 高等学校家庭科の履修科目

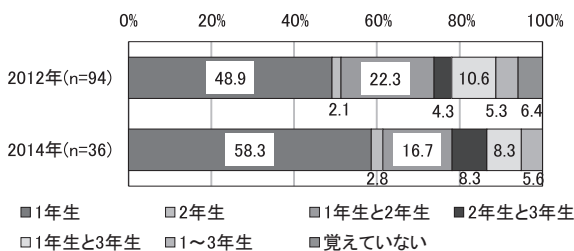
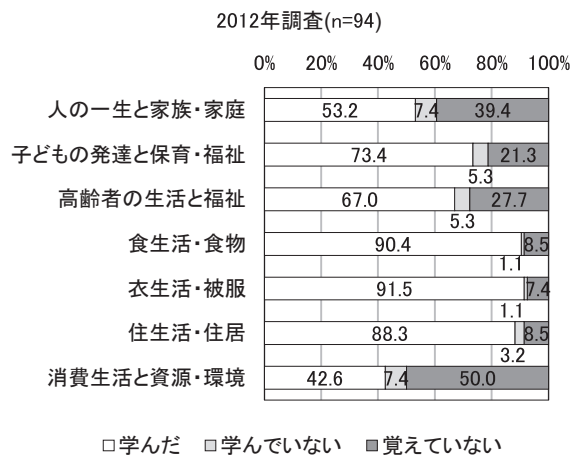


図2 家庭科を履修した学年

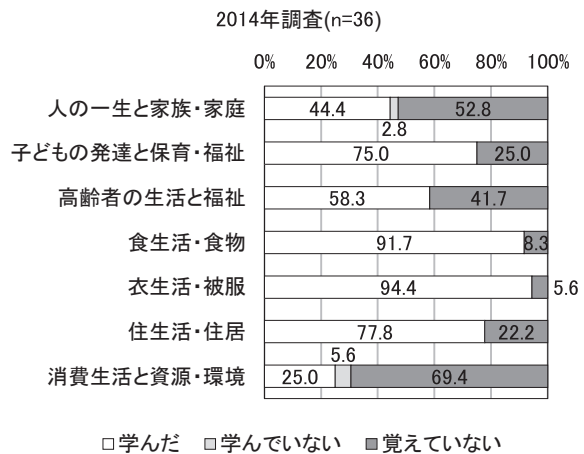
家庭科の履修を高校1年生で終えている学生が半数から約6割、高校2年生までに終えている学生が全体の1/5～1/4程度いることから、学生が高校で家庭科を学んでから大学入学後に家庭科教職課程の基礎科目(住生活論、衣生活論等)を履修するまでに1、2年が経過していることになる。

2) 家庭科領域の学びの経験

高等学校家庭科の学びの経験を図3に示す。「学んだ」ことがある領域をみると、2012年度調査では「衣生活・被服」91.5%、「食生活・食物」90.4%、「住生活・住居」88.3%と衣食住の領域が9割近くを占める。ついで「子どもの発達と保育・福祉」73.4%、「高齢者の生活と福祉」67.0%となっている。「学んでいない」と断定できる領域はどの領域も1割に満たない。一方、学んだかどうかを「覚えていない」領域は「消費生活と資源・環境」50.0%、「人の一生と家族・家庭」39.4%となっている。2014年度調査でも、衣食住の3領域については「衣生活・被服」94.4%、「食生活・食物」91.7%、「住生活・住居」77.8%と、他の領域よりも高い割合となっている。一方、学んだかどうか「覚えていない」領域は、「人の一



□学んだ □学んでいない ■覚えていない



□学んだ □学んでいない ■覚えていない

図3 高等学校家庭科の学びの経験

生と家族・家庭」52.8%、「消費生活と資源・環境」69.4%となっている。なお、「学んでいない」と断定できる領域は「人の一生と家族・家庭」2.8%、「消費生活と資源・環境」5.6%に留まる。

「学んだ」と自覚的な回答が9割を超える領域は「食生活・食物」、「衣生活・被服」のみである。これらは調理実習、被服実習など体験の記憶が残るため、他の領域よりも値が高いと考えられる。一方、学んだかどうか「覚えていない」割合が高い「人の一生と家族・家庭」は、通常最初に学ぶ領域であり、高校1年生にとっては人の一生や家族といったテーマが「学んだ」こととして定着しにくいと考えられる。

3) 印象に残っている家庭科の授業

印象に残っている家庭科の授業について自由記述で聞いたところ、2012年度調査では19名、2014年度では25名の回答があった。回答記述から授業の領域を想定し、分類した結果を表2、表3に示す。2012年度調査で回答が多かったのは食生活・食物分野の授業で13件だった。そのうち8件は「調理実習」であり、全体で最も多い回答だった。2014年度調査では25名の回答があった。2012年度と同様に、調理実習14件、被服実習8件と実習が印象に残っている様子が見て取れる。また、折り紙を使った

り、自分で絵を描いて「絵本を作る」授業、自分の部屋や住宅の平面図を描いたり、デザインする授業などがあげられている。

以上より、調理実習、被服実習に加え、保育、住生活の分野でも実際に手を動かして、何かしら制作する授業が印象に残っている様子がわかる。

(2) 家庭科住居領域の学びの現状

1) 住居領域の学びの経験

高等学校家庭科住居領域の学びの経験を図4に示す。「学んだ」ことがある内容を見ると、2012年調査では「住まいの役割・機能」69.1%、「家族の生活と住空間の関係」47.9%、「気候風土と住まい」45.7%が上位となっている。一方、「住まいの歴史」は16.0%、「住まいの維持管理」、「住宅問題・住宅政策」、「住宅の選び方・消費者問題」は18.1%に留まる。他の学びの内容は3割前後であった。2014年度調査では「学んだ」ことのある内容は2012年度調査と同じく、「住まいの役割・機能」63.9%、「気候風土と住まい」41.7%、「家族の生活と住空間の関係」38.9%が上位となった。経験が乏しい学びは2012年度調査と同様の「住まいの歴史」、「住まいの維持管理」、「住宅問題・住宅政策」、「住宅の選び方・消費者問題」に「災害への対策・防犯」が加わる。また、「覚えていない」

表2 印象に残っている家庭科の授業 (2012年度調査)

領域	回答数	授業内容に関する記述	
保育	2	離乳食	
		自分でストーリーと絵を考えて、絵本を作りました。	
食生活・食物	5	栄養の計算の問題	
		食べ物について、たんぱく質などの分類	
		食文化という授業で、昔の人が食べていたチーズのようなもの（名前が思い出せません。）を実際に食べたりしたこと	
		食中毒を引き起こす原因となる細菌類の紹介や、それを防ぐためにどうすべきか、というビデオをみたこと	
		自分で献立を考えてレシピを用意し時間内に作る、というテストが印象に残っています。	
	8	調理実習	
衣生活・被服	2	被服実習	刺繍、編み物
			自分で色染めした布でかばんを作った。
住生活・住居	1	防犯や災害の対策についての授業	
消費生活	1	マルチ商法などの消費者問題	
その他	2	ユニバーサルデザインについて	
		(ワンガリ・) マータイさんの「もったいない」についての話が印象的だった。	

(n = 19, 複数回答)

表3 印象に残っている家庭科の授業（2014年）

領域	回答数	授業内容に関する記述	
保育	3	赤ちゃんの発育	
		折り紙を使い絵本を作ったこと	
		子どもの発達	
食生活・食物	1	食物の衛生や栄養について学んだ。	
	14	調理実習	みんなでテーブルを囲い、楽しい食事をしたことが印象に残っている。
			きゅうりの輪切り
			調理実習で中華と洋食を作ったこと
			フードデザインで、自分たちが1から決めて、それぞれの目標を作りやっていた。
			大根ときゅうりの早切りテスト
			献立を考えて自分で食事を作ったこと
調理実習で苦手な魚（さわら）を調理したこと			
衣生活・被服	1	洗濯洗剤の実験	
	8	被服実習	コースターづくり
			裁縫。男女で協力して、教え合って裁縫をし、みんなで高め合ってきれいに縫えるようにがんばったが印象に残っている。
			エプロンを縫って刺子でデザインしたこと
			刺子
			被服の授業で浴衣づくりをしたこと
			エプロン制作
			エプロンに刺繍した。
刺子			
住生活・住居	4	家具のチラシを集めて、自分の好きな部屋をデザインする授業が印象に残っています。	
		授業の終盤に、自分の部屋をデザインしたこと（平面図）	
		住宅のチラシを好きなものを選んで、何LDKかなど詳しい情報を読み取ったこと	
		自分で家の平面図を作った。	
その他	1	ユニバーサルデザインについての授業	

(n = 25, 複数回答)

学習内容をみると、両年度ともに13項目中11項目が4割以上を占めている。

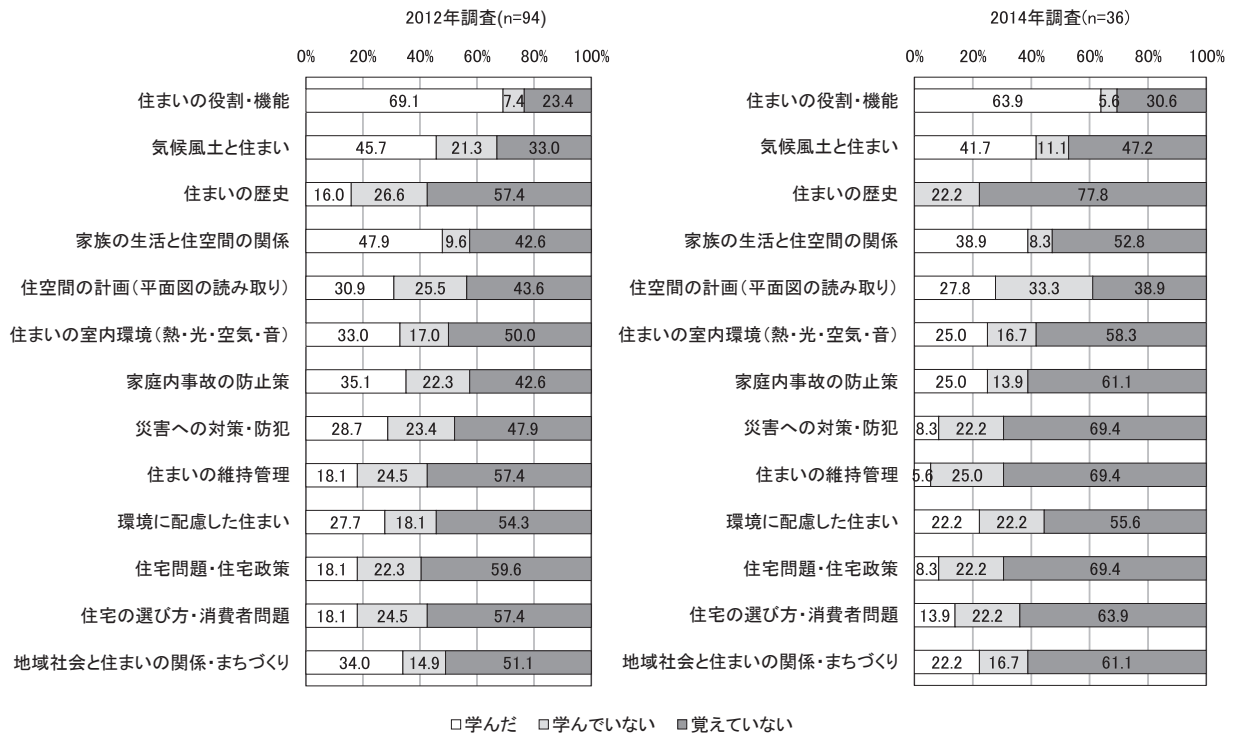
以上より、高校生の住生活と照らし合わせやすい内容や実践しやすい内容が「学んだ」内容にあげられている。一方、生活の中で本人が実践しにくい、長期的視点や社会的視点が必要になる「住まいの維持管理」、「住宅問題・住宅政策」、「住宅の選び方・消費者問題」は覚えていない割合が高くなっていると考えられる。また、学習内容を「覚えていない」学生のほうが、学びの経験に自覚的な学生よりも多く、高等学校家庭科での学びが学生に定着していない様子がわかる。

2) 住生活に関する言葉の理解

小学校、中学校、高等学校の家庭科教科書に掲載されている住生活に関する言葉を抽出し、言葉の理解、認知について3段階で聞いた結果を図5に示す。

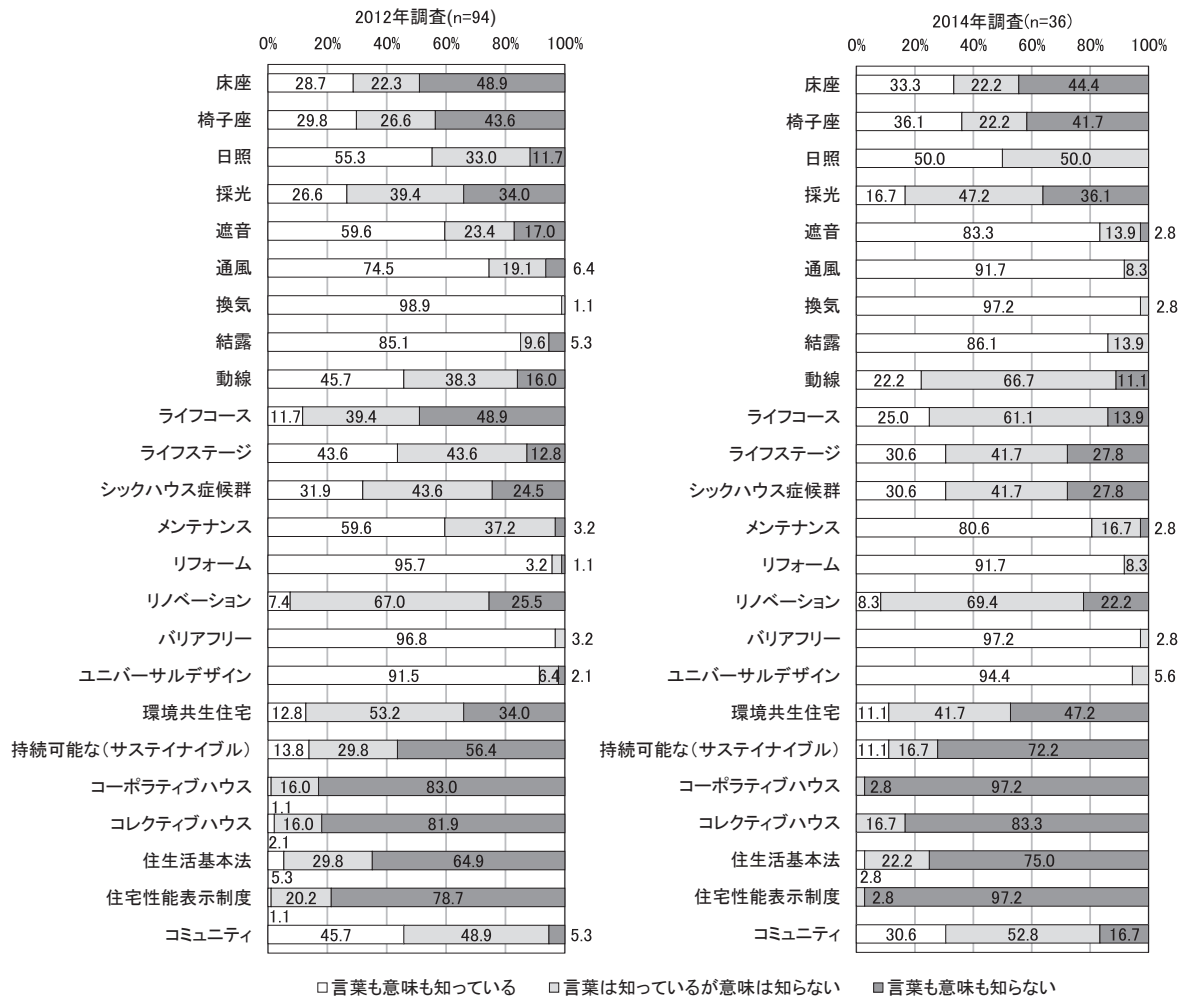
2012年度調査では、「言葉も意味も知っている」と回答し、理解および認知が高い言葉は「換気」98.9%、「バリアフリー」96.8%、「リフォーム」95.7%、「ユニバーサルデザイン」91.5%、「結露」85.1%だった。一方、「言葉も意味も知らず」、理解および認知の低い言葉は、「コーポラティブハウス」83.0%、「コレクティブハウス」81.9%、「住宅性能表示制度」78.7%、「住生活基本法」

大学生の高等学校における家庭科住居領域の学びの現状



□学んだ □学んでいない ■覚えていない

図4 家庭科住居領域の学びの経験



□言葉も意味も知っている □言葉は知っているが意味は知らない ■言葉も意味も知らない

図5 住生活に関する言葉の理解

64.9%だった。

2014年度調査では、「言葉も意味も知っている」言葉は「換気」97.2%、「バリアフリー」97.2%、「ユニバーサルデザイン」94.4%、「通風」91.7%、「リフォーム」91.7%、「結露」86.1%だった。一方、「言葉も意味も知らない」言葉は、「コーポラティブハウス」97.2%、「住宅性能表示制度」97.2%、「コレクティブハウス」83.3%、「住生活基本法」75.0%、「持続可能な（サステイナブル）」72.2%だった。

以上より、「住まいの室内環境」に関する言葉については理解も認知も高いことがわかる。特に「換気」、「通風」は小学校家庭科で学習する言葉であり、日常生活の中でも使われるため理解・認知が高いと考えられる。また、「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」の理解・認知が高い理由として、家庭科の中でも住居領域に限定されることなく学ぶ言葉であり、他の教科や日常生活でも耳にするためと考えられる。

(3) 学生たちの学びへの関心

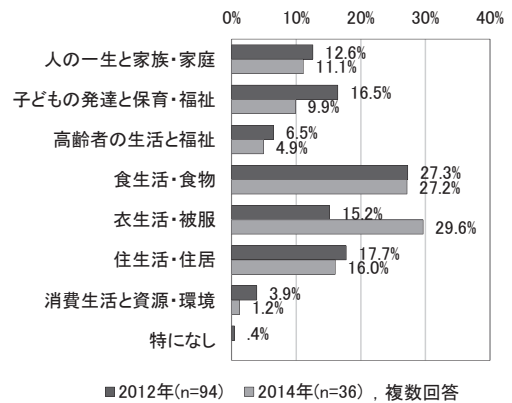
1) 家庭科の領域への関心

家庭科が扱う領域のうち関心のある領域について、複数回答でたずねた結果を図6に示す。2012年度調査では、「食生活・食物」27.3%、「住生活・住居」17.7%、「子どもの発達と保育・福祉」16.5%の順に関心が示された。2014年度調査では「衣生活・被服」29.6%、「食生活・食物」27.2%、「住生活・住居」16.0%の順となった。

今回の調査は「住生活論（含住居学概論）」履修者を対象にアンケート調査を行ったが、調査結果からは履修者の「住生活・住居」への関心が高いとはいえない。また、関心の高い「食生活・食物」は高等学校家庭科で学んだ自覚が高い領域であり、関心の低い「消費生活と資源・環境」は高等学校家庭科で学んだ自覚が低い領域であることから、高等学校家庭科での学びの経験によって、大学1年生の学びへの関心に違いが生じると考えられる。

2) 住居領域への関心

学生に関心のある住居領域の内容を4段階で聞いた結果を図7に示す。2012年度調査では、「非常に関心がある」、「ある程度関心がある」の回答を合わせると、学生の関心が高い住居領域は、「住宅の選び方・消費者問題」



■2012年(n=94) ■2014年(n=36), 複数回答

図6 家庭科の領域への関心

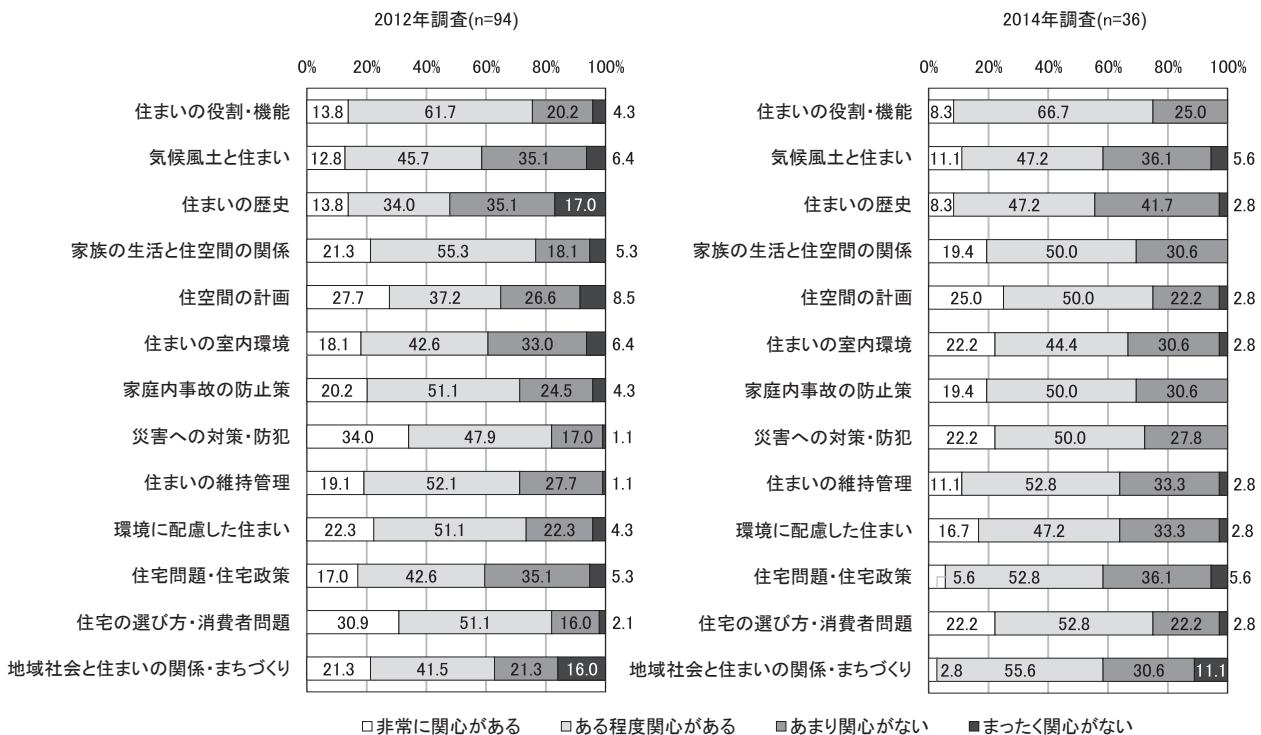


図7 学生の住居領域への関心

82.0%、「災害への対策・防犯」81.9%、「家族の生活と住空間の関係」76.6%となった。関心の低い住居領域は「まったく関心がない」、「あまり関心がない」を合わせると、「住まいの歴史」52.1%、「気候風土と住まい」41.5%、「住宅問題・住宅政策」40.4%となった。2014年度調査は2012年度に比べ、全般に関心が低かった。その中で、「住まいの役割・機能」、「住空間の計画」、「住宅の選び方・消費者問題」がいずれも75.0%、次いで「災害への対策・防犯」が72.2%となり、関心が高い住居領域だった。一方、関心の低い住居領域は「住まいの歴史」44.5%、「気候風土と住まい」41.7%、「住宅問題・住宅政策」41.7%、「地域社会と住まいの関係・まちづくり」41.7%だった。

以上より、2012年度調査、2014年度調査、いずれも関心が高い住居領域として、「住宅の選び方・消費者問題」、「災害への対策・防犯」があげられている。これは高等学校家庭科での学んだ経験が少ない内容である。ここから、高等学校での学びとは別に、大学生として住生活に関心を抱く姿が読み取れる。一方、関心の低い住居領域も両年度共通して「気候風土と住まい」、「住まいの歴史」、「住宅問題・住宅政策」があげられている。理由として「気候風土と住まい」はすでに高等学校家庭科で学んだ経験があること、「住まいの歴史」、「住宅問題・住宅政策」は実生活への結びつきが学生には想起しづらい内容であることが考えられる。

4. まとめ

家政系学部における家庭科教職課程カリキュラムを検討するための基礎的資料を得ることを目的に、家政系学部生を対象に高等学校家庭科の学びの経験および家庭科住居領域への関心について現状把握を行った。

調査結果より、住居領域は食物領域、被服領域に次いで高等学校家庭科で学んだ自覚の高い領域であるが、学んだことのある住居領域の内容には偏りがあることがわかった。また、学びの内容13項目中11項目については「覚えていない」学生が4～7割を占め、高等学校家庭科での学びが学生に残っていないことがわかった。一方で、大学1年時点で家庭科住居領域が扱う内容について広く関心を持っている様子も確認できた。よって、家庭科教職課程における初年次の基礎科目では、高等学校家庭科からの継続を意識した授業内容にすること、家庭科住居領域については大学においても継続的に「生活に必要な知識と技術」、「主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度」を養うカリキュラムが必要であるといえる。

今回は「住生活論（含住居学概論）」履修者全体の様子を把握した。今後は、対象を家庭科教職課程で学ぶ学生に絞り、住生活の実態や学習のつまずきについて把握を行う。

引用文献

- 1) 文部科学省, 高等学校学習指導要領解説家庭編, 2010
- 2) 小倉育代, 宮崎陽子, 大本久美子, 表真美, 岸本幸臣, 長石啓子, 吉井美奈子, 家庭科教員の家政学認識と教育現場の課題, 家政学原論研究, No. 43, pp. 30-38, 2009
- 3) 「生活する力を育てる」ための研究会, 人と生活, 建帛社, 2012
- 4) 速水多佳子, 関川千尋, 学校教育における住居領域の教育システムの有効性について, 日本家政学会誌, Vol. 51, No. 4, pp. 317-330, 2000
- 5) 速水多佳子, 家庭科住居領域の指導の実態と課題: 中学校教員の調査を通して, 日本建築学会大会学術講演梗概集2015 (教育), pp. 43-44, 2015